



人妻乱戯 牧村 僚

時計の針が夜の十時をまわるころ、隆史は電気を消し、部屋の北側に作られた小窓に近づいた。持ってきた椅子に腰をおろし、じつと下方に視線を注ぐ。

ここからは、南を向いた隣家のリビングが見通せるのである。レースのカーテンだけは閉じられているものの、明かりがついているため、ほとんど内部は丸見えに近い。

有美子の夫は銀行勤務で、帰宅は午前零時をすぎる場合が多い。暇を持って余した彼女がソファアで雑誌などを広げるところは、ほぼ毎日見ている。だいたいミニスカートをはいているため、それだけでも隆史には充分に刺激的なのだが、ごくたまに、有美子は入浴後

に下着姿でリビングに現れることがある。そんなとき隆史は、まばたきするのも惜しんで有美子を見つめながら、ごしごしと肉棒をしがきあげることになる。

おばさん、ほんとうにぼくを誘っているんだろうか？ 夕方、有美子と交わした会話が耳によみがえり、隆史はそれだけで興奮した。股間に血液が集まり、パジャマの前の部分もつこりと盛りあがってくる。

あすは学校帰りに隣家に寄ることになっている。大学合格のお祝いは何がいいか、それまでに考えておくように。有美子にはそう言われた。本音を言えば有美子が欲しかった。隆史にはまだセックスの経験がない。あこがれの有美子の体で初体験ができるのなら、これ以上はないほどのプレゼントになる。

しかし、自分から有美子に迫っていくだけの勇氣はなかった。できれば有美子に誘って

ほしいところなのだ。夕方の彼女の態度を考えると、その可能性もないとは言えない。

あとひと月半もすれば、隆史はこの家を出ていく。東京の新宿に借りたワンルームマンションから、四谷の大学に通うのである。あすが無理でも、なんとかここにいる間に有美子と経験したい。そう思わずにはいられなかった。東京で暮らしはじめる前に、せめて童貞には別れを告げておきたいのだ。

辛抱強く待っていると、十時半近くになって、ようやく有美子がリビングに現れた。隆史の望みどおり、下着姿である。ベージュ系のミニスリップをつけているが、ブラジャーをしていないのは明らかだった。有美子が歩くごとに、スリップの生地ごと、胸がゆさゆさと大きく揺れる。

「ああ、おばさん」

思わず声に出してつぶやいた隆史は、いつ

たん立ちあがって机の引き出しを開けた。以前に盗んだ有美子のパンティーを取り出し、パジャマのズボンとブリーフを引きおろしたうえで、あらためて椅子に腰を沈める。

有美子は二人掛けのソファアームに座り、缶ビールを飲みはじめた。入浴後には、いつも見かける光景である。二十分ほどこうして休んだあと、電気を消して奥に引きあげることが多い。その二十分が、隆史に与えられたオナニータイムということになる。

左手でパンティーを顔に押し当てながら、隆史は右手でしっかりと肉棒を握った。完璧なまでに勃起したペニスは、熱を持っているように感じられた。スリップの生地を突きあげる乳房、裾から露出したふとももに目をやりながら、隆史はゆっくりと右手を動かさしはじめる。

有美子は上を向くようにして、ビールを飲

み干した。ここまではよく見る光景だったが、

そこで信じられないことが起こった。有美子がソファーに身を横たえ、大きく脚を広げたのだ。左脚はソファーの背もたれに載せ、右脚は床に投げ出している。丸見えになった白いパンティーの股布に、やがて有美子の右手があてがわれる。

すごい。おばさん、オナニーをするつもりなんだ。驚きと興奮で、隆史の呼吸がいつペんに荒くなった。肉眼で眺めているだけでは、とても我慢できなくなった。持っていたパンティーを置き、下半身剥き出しのまま立ちあがると、本棚の上からオペラグラスを持ってきた。三倍程度の倍率しかないが、目に当てると有美子の指までがはっきり見えた。

ほっそりした指先が、パンティーの上を妖しく這いまわっていた。顔に目をやると、有美子は眉間に皺を寄せ、悩ましげな表情を浮

かべている。

「ううつ、ああ、おばさん」

無意識のうちに声をあげ、隆史はふたたび右手で硬直を握った。オペラグラスから目を離さないまま、ごしごしと肉棒をこする。すぐにでも射精が襲ってきそうだったが、緩急をつけて暴発をこらえた。それでも煮えたぎった欲望のエキスが、すでに放出の準備を整えているのがわかる。

やがて、有美子の動きに変化が起こった。股間に這わせていた指の何本かを、パンティーの脇から中へもぐり込ませたのだ。薄布の表面がもそもそとうごめくさまが、隆史の目にはなんとも淫猥に映る。

女性もオナニーをすることぐらいは、隆史も知っていた。アダルトビデオで、何度かそういうシーンを見ている。だが、実際に目の当たりにすると、その迫力は想像以上にすさ

まじかった。ほんの十四、五メートル先で、有美子が秘部に指を這わせているのである。

有美子の指の動きがスピードを増した。口をぱくぱくさせているところを見ると、あえぎ声をもらしているのかもしれない。有美子のセクシーボイスを、隆史は鮮明に想像することができた。肉棒を握る手に、思わず力がかもる。

長くはもちそうもなかった。むっちりした白いふともも、スリッパを突きあげる豊かな乳房を目に焼きつけながら、隆史も右手の動きを速めた。射精はもうすぐそこまで来ている。

だが、あと少しというところで、携帯電話が着信音を奏でだした。無視することも考えたが、そういうわけにはいかなかった。卒業を控え、この時期、友人たちと大事な連絡を取り合うことも多い。胸底で舌打ちし、もう

一度、有美子の白いふとももに目をやってから、隆史はオペラグラスを置いた。立ちあがり、机の上から電話を取りあげる。

「隆史？ あたしだけど」

「ああ、きみか」

クラスメートの新道里香だった。小学校から高校までずっと一緒に、この春から、とうとう大学まで同じところに通うことになってしまった。里香は文学部、隆史は法学部という違いはあるものの、キャンパスで顔を合わせることになるに違いない。

長い付き合いだッに、お互いにファーストネームで呼び合っている。隆史は特に意識したことはないのだが、里香のほうは隆史に大きな関心を抱いているようだった。中一ころから、バレンタインデーには欠かさずチョコレートをプレゼントされている。

「どうしたんだよ、こんな時間に」

左手で受話器を耳に押し当てたまま、隆史は窓際に戻った。有美子のオナニーは、まだ続いていた。佳境に入ったらしく、ときおり腰を宙に突きあげたりもする。

「ねえ、住むところ、新宿だって言ってたわよね。どのへんに決まったの？」

「余丁町ってところだよ。地下鉄の新宿御苑前まで歩いて十二分だから、四谷へ通うにはすごく便利なんだ」

「そこを紹介してくれた不動産屋さん、教えてくれないかな。あたしも、できれば近くに住みたいし」

「近くに？」

「せっかく同じ大学に入ったんだもの。これからも仲良くしたいじゃない？」

「う、うん、それは、まあ」

隆史は特に里香と仲良くしたいとは思わなかった。いまは一刻も早く話を終わらせて、

オナニーに専念したいところだが、里香はなかなか切ろうとしない。

「絶対に教えてよね、その不動産屋さん」

「わかった。あした学校で教えるよ」

「ありがとう。それとね、もう一つ大切な話があるの」

里香はそこで言葉を切った。迷っているようにも、あるいはもつたいをつけているようにも感じられる。隣家では、有美子がいつしか指をパンティから抜いていた。オナニーは終わったらしい。それでも脚を広げたまま、ソファアに横たわっている。

里香の話など聞いている場合ではなかった。リビングの電気が消える前に、なんとか射精まで持っていきたい。

「悪いな、里香。ちよつと忙しいんだ。その大切な話って、またでいいだろう？」

「えっ？ うん、まあ、かまわないけど」

「それじゃな。あした学校で」

里香は不満そうだったが、隆史はかまわず切った。電話を放り出し、先ほどまで手に持っていた有美子のパンティーで、屹立した肉棒を包み込んだ。あらためてオペラグラスを目に当て、猛然と右手を動かした。

「おばさん。ああ、おばさん」

白いふとももの付け根にあるパンティーの股布を、隆史はじつと見つめた。一部、色が変わっているのがわかった。おそらくあふれ出た淫水が、シミを作ったのだろう。一気にたまらない気分になる。

間もなく、背もたれに載せていた脚を戻し、有美子がゆっくりと立ちあがった。

待って、おばさん。もうちよつとだけ待って。心の中で呼びかけながら、隆史は手の動きを速めた。体全体が揺れてしまい、オペラグラスを支えきれなくなった。肉眼に戻し、スリ

ップ姿の有美子を見つめながら、隆史はラストスパートに入る。

「出るよ、おばさん。ぼく、出ちゃう」

有美子のパンティーに向かって、猛然と白濁液が噴出した。その直後、隣家のリビングの明かりが消えた。

(続く)

【著者略歴】

牧村 僚（まきむら・りょう）

1956年東京生まれ。筑波大学を卒業後、フォーク歌手を目指したものの失敗。芸能プロダクションに勤務するかたわら、音楽系のライターに転身。その後、官能小説に関心が高まり、91年『姉と叔母 個人教授』（フランス書院刊）でデビュー。肉体的なこだわりから「ふともも作家」の異名をとる。
